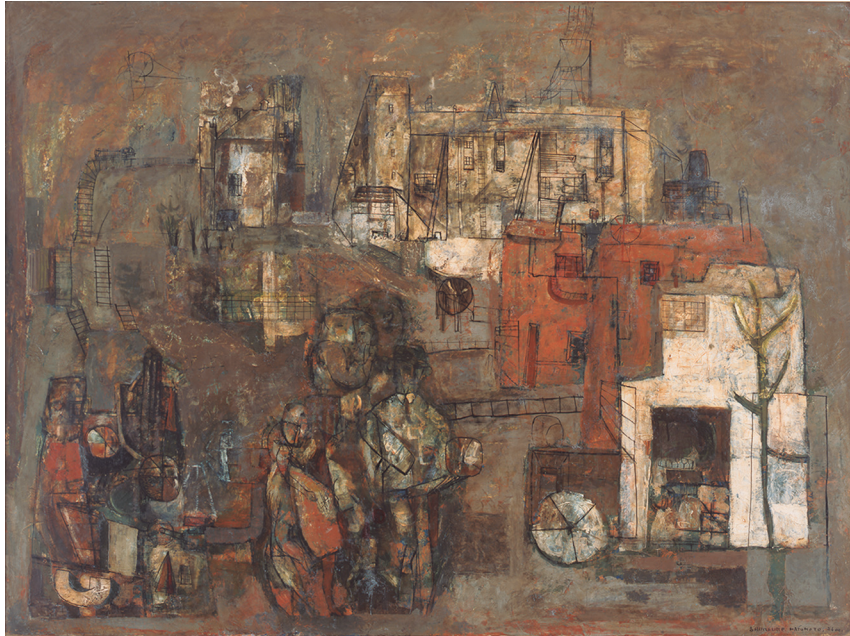


松本竣介

《N 駅近く》



松本竣介 (1912-1948)  
《N 駅近く》

1940年  
油彩・キャンパス  
97.0 × 131.0cm  
平成27年度購入

2

のたび、当館では松本竣介の油彩六點、素描五點をまとめて収蔵することができました。すでに当館では、絶筆の《建物》(一九四八年)をはじめ、数点の珠玉ともいべき作品を所蔵しておりますが、いずれも小品であり、竣介が一九三八年から四〇年にかけて集中的に取り組んだ、都会の建物や人物群をモニタージュ風に構成した作品をコレクションに加えることは悲願ともいべき課題でした。それがようやく叶ったこととなります。

このたび収蔵した作品のうち、モニタージュ風の構成によるものは、この《N 駅近く》と《黒い花》(一九四〇年)の二点。いずれも竣介の画業の中できわめて重要な作品です。というのは、これらは九室会の第二回展に出品されているからです。九室会とは、竣介が出品していた二科会の中の前衛的傾向の画家たち(吉原治良、斎藤義重、桂ゆき等)によって結成されたグループで、竣介はこの第二回展から参加しました。つまり、彼が表現の上での前衛性を最も先鋭化させた時期の作品と位置づけることができるわけです。

しかし、竣介が単に形式的な新しさを求めていたわけではないことが、次の文章からもわかります。展覧会にあわせて刊行された九室会の機関誌『九室』二号に、彼は《N 駅近く》の図版とともにこんな文章を寄せているのです。「非常識よりも、甚

だしい常套的な感覚の中に救ひのない暗さを観る。時の鑄型からはみでない感覚をもつてする生活は、一応健康であることを誰もが認めるために袋路に澱んでゐる頭脳と眼。僕はこの時代の肩をいからした人の眼に衝きあたり大変な戸惑ひをする」(『アバンギャルトの尻尾』)。ここで語られているのは、戦時下における一種の同調圧力への抵抗でしょう。個の存在のかけがえのなさを守ろうとする彼のヒューマニスティックな態度がよくわかります。いま、私たちがあらためて嘯みしめるべき言葉です。

もちろん、こうした彼の態度は、なにより作品に如実に表れています。彼の絵の中に視線を遊ばせ、重層的な街と人との関係をたどっていると、しばし時のたつのを忘れるでしょう。じっくりと時間をかけて、絵の中の街を訪れてみてください。竣介の親友、麻生三郎は、『N 駅近く』をはじめとするモニタージュ風の作品について「これらの絵の背景のこまかな建物、都会風景の連続には、人間生活が愛情のある眼で描かれている」(『松本竣介画集』平凡社、一九六三年)と賞賛しました。竣介も、先に引用した文章の最後にこう書いています。「美とは。愛することだ。愛することによつて知る。愛さずして理解できるといふ考へは、驚くべき現代の欺瞞だ」。

(美術課長 大谷省吾)